
ある魔術師の物語 参話

桜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある魔術師の物語 参話

【Nコード】

N1953S

【作者名】

桜月

【あらすじ】

セリアと名乗った女性に別れを告げて、王都ファロを目指し歩を進め始めたゼロ。

参話は参部構成です

ある魔術師の物語 参話 第一章（前書き）

第一部です。

読んで下さって居る方は、楽しんでいただけたら嬉しいです（
）¹ A

ある魔術師の物語 参話 第一章

「セリア、ね。分かった、覚えとく。またどこかで会えるといいな」
俺は彼女の笑顔見て少し赤くなった顔を隠すために、背を向けて歩き始めた

「はい。私もまたお会いしたいです。」

セリアは今もまた笑っているんだろう。
なんとなく雰囲気で分かった。

それきり俺は振り返る事無く歩いた。

黙々と歩いて、そして森から出た

それ程大きな森では無かったようだ。

多分出るのに10分も掛かっていないだろう。

「セリア、ね。」

何気なしに彼女の名前が口から出たが

「つて、女の人の事考えてるほど暇じゃないよな、俺」

直ぐに頭を振ってセリアの事を考えないようにした。

そう、俺がこのフレアスを訪れたのはある仕事の為だった。

これは今更だが、この世界には六つの大陸がある。

火の元素の大陸

フレアス

風の元素の大陸

ウインス
水の元素の大陸
アリアス
土の元素の大陸
トールス
光の元素の大陸
ホリアス
闇の元素の大陸
メシアス

しかし六つも大陸がありながら、色々な可能性がありながら、この世界は、とても不安定だ。

政治も経済も資源も人種も、生死の捉え方すら。

なのに言語は統一されている。

ある変人考古学者の知り合いによれば、おおよそ5千年前からそうだったらしい

六つも大陸があるのだから、それぞれの大陸、人種で言語が異なっている方が普通なのに。

なぜ統一されているのかは全く分からない。

しかし、なぜ統一されているか、そんなある種異常とも言える状況を考えているのは知り合いを含む一部の学者達しか居ないだろう。

だって、一人一人が自分の事で精一杯なのだから、そんな事を考えている余裕などない。

人間だれしも最後は一人、とかいうのとは別の次元である。
それぞれの生活の事で本当に精一杯、簡単に言えば貧困に喘いでい

る。

貧困の原因は戦争。

：この世界では六年程前、第一次六旗大戦ろっきたいせんという世界戦争が起きた。
（正確には起きたらしい。記憶を失ったのは三年前からだからそんな戦争なんて知らない）

原因は世界の全ての元素の、壊滅的なまでの量の消滅。

それにより全大陸で魔術が使えなくなってしまった。

これを何らかの魔術行使の影響だと踏んだ各大陸を纏め上げている六つの王家は、疑心暗鬼にかられ、剣と弓を手に互いの大陸へ進攻した。

それにより膨大な死傷者、各国の信頼関係を失った。

：しかし六年たった今、元素は六年前とほぼ変わらなく、ご存知の通り魔術も使用可能。

：俺が記憶を失った三年前も、既にある程度は魔力も元素も回復していたようだ。

しかし各国の信頼や深い戦争の傷跡は、六年たった今もまだ完全に直ってはいない。

所どころで内戦や食料難などが起きており、違う大陸へ色々な事情で旅に行くのにも嚴重なボディチェックと身元確認が行われる。

（フレアスでも一時内戦が勃発し、危うく居住区が倒壊しそうになったとか）

：説明が長くなったが、そうした戦争で被害にあった人々の依頼に答える、いわばギルドのようなものに俺は加入している。

（その中の一黒い月一 という部隊だ。）
そして俺はある人物の依頼に答える為に、今フレアスの王都ファロを目指している。

「へえ、ファロまではこの道を一直線か。楽だな」

先ほどの森を出て直ぐに街道にぶちあったた為、道に迷う事無く王都へは行けそうだった。

ある魔術師の物語 参話 第一章（後書き）

これは参部制の一部なので、なんか説明っぽくなってしまいました。
これからもある魔術師の物語 にどうぞお付き合い下さい m（

） m

ある魔術師の物語 参話 第二章（前書き）

漢字ミスや描写に味気ない所が（後々気に入らない所）あったので
改定いたしました。m（　　）m

ある魔術師の物語 参話 第二章

「しかし、考えてみりゃ久しぶりの部隊長直々の依頼なんだよな。」

真っ直ぐなファロへの街道を、またベタな盗賊達に、というより、あの魔術を使う連中に襲撃されないか若干警戒しつつ歩いている途中、依頼の内容を確認することにした。

「…ゼロ、今回の依頼内容は、王都ファロの第四地区に居る魔術研究者と接触し、その人物から再度依頼内容を聞け。なお、緊急時には物資と救助は出ない。たとえば挽き肉になろうと、爆死しようと拉致監禁されようとか、死を心せよ…ね。」

…部隊長どの、依頼書ってのはもっと軽い感じで書いて下さいって過去二回言ったじゃないですか。何度読んでもテンション下がりますよ」

…今回の依頼を依頼して来たのは、黒い月一の部隊長、ネロ・フエイス・オルバという人物だ。

俺は部隊長に依頼された事が過去に二度あり、その依頼でファロとホリアスには実際に訪れていた。

…部隊長はお堅く真面目すぎる人物で魔術師を嫌っている節があるが、記憶を無くし、行くあても無かった、魔術師である俺を黒い月一に引き入れてくれた。

…俺は居場所をくれたネロ部隊長に多大な恩を感じている。だから、たとえば依頼書をよんだ途端にテンションがただ下がりしようとも、依頼は断れないのだ。

「でも、いくらなんでも仕事を3つ一気に片付けた後だったの。サイズも少しは休ませろよなあ。

ちくしょう、腹いせに帰ったらサイズの食べる料理にピーマンとタバスコをしこたま紛れこませてやる…」

自然と怨みが籠もった独り言がブツブツ漏れる。

だって仕方無いじゃないか。

徹夜して依頼終えてゆっくり休もうと寝てる時に、俺に依頼を伝達する役目の（実質的には出されている依頼を選定し俺に執行させる）毒舌無表情少女であるサイズ・クリセリアに

「仕事よ。とっとと起きたらどう？」

と、思いつきり無表情で腹を殴られたんだから。

起きる所か永眠する所じゃねえか、バカたれ

…やっぱりピーマンだけにしとくか。タバスコ、前イタズラで混ぜたら泣いちゃったし。

「って、んな事考えてる間にファロじゃねえか。」

そう、依頼内容&ムカつく記憶を思い出してる間にファロに着いてしまった。

「止まれ！」

そのままファロの門をくぐろうとすると、衛兵に道を阻まれた。確か以前来た時には居なかったぞ？

「なんですか？」

「現在ファロには厳戒態勢が敷かれている。旅人は居住区に行けっ！」

脅すような大声で言ってきたが正直怖くない。

俺は理由を聞いてみる事にした。

「あの、なんかあったんですか？」

すると衛兵は

「ふん、外の大陸の虫なんぞに教えてやる義理は無い。どうしても聞きたいならその場で聞きたいですお願いしますと、虫のように這いつくばるのだな」
などとのたまった。

カチンときた。ええ、もう完璧なまでに。この大陸の情勢とかこの衛兵に過去色々あったのかも知れないとか、そんな事一切関係なく。

「エイヘイサン、イマナンテ？」

今の俺は多分、満遍の笑みだ。

「だから、貴様なんぞに教えてやる義理は無いと…ヒッ！」

こちらを見ていた衛兵の顔が恐怖に引きつる。

なにせ、俺の背後には巨大な剣、タケミカズチが具現していたのだから…

無詠唱による光と風の複合魔術、タケミカズチの具現化。

正直、無詠唱では破壊力は無いに等しい。いわばタケミカズチを模しただけの魔力の塊だが、人が当たれば感電し、気絶するくらいの威力と、見た者を震え上がらせるくらいの迫力があった。

「きつ貴様っ！王都の門前で魔術を使うなど！不届き者めっ！」

気丈にも腰の剣を抜いて立ち向かって来たが、これ以上長引かせるとこの騒ぎの中、何故か来ない他の衛兵に本当に駆けつけられても困るので、俺は

「虫はてめえだコラぁー！！！」

迷いなく衛兵にタケミカズチを全力でぶち当てた。

その後、しばらくピクピクしていた衛兵だったが、気絶して動かなくなった。

「まったくよお、こちとらイライラしてたんだよ。」

：ファロの門を大股でズカズカ歩いて過ぎていくゼロを、ゼロを知る人物達が見ればこう多分思っただろう

ああ、あれ多分八つ当たりだ：

：ゼロは戦闘時には、どんな汚い手段を使っても敵を倒す　という考え方をもって、実際にこれまでも汚い手段で名のある騎士や魔術師を倒してはいるが、それは依頼に必要だったからで、普段はどちらかと言えば温厚な人物である。

それに依頼達成の為ならばどんな罵詈雑言であろうと軽く流すゼロが、こんな目立つ場所でタケミカズチなんて目立つような魔術を（

威力をなんとか理性で抑えてあるとは言え）使用するのは普段では絶対に有り得ないのだ。

そう、理由は言わずもがな、さっきの思い出しイライラである。

あの衛兵は飢えた熊の前で鮭を焼いて食べたようなものなのだから、自業自得、四割、ゼロと出会ってしまった不幸六割、といった感じなのだった。

「さて、無事に門越えたが…」

あの衛兵なんぞ知らん。知った事ではないが…

……ファロを出る時には夜に出るとしよう

無事、ファロに入国（侵入？）し、少し頭を冷やしたゼロだったが、次の瞬間

「居たぞあいつだっ！捕まえろ！」

と、大声がした。

ヤバイ！バレた！ていうかバレねーわけねーよなっ！あんなもん使っただけで！

なんて考え、取りあえず傍にあった路地裏に身を踊らせたが、どうやらゼロの事では無かったようで、

「あっちだ！逃がすな！」

やら

「なっ！この魔術、貴様、どこで！」

とか聞こえたあと、数人の悲鳴と爆音が聞こえた為、取りあえず路地裏から身を出し、爆音の場所へ向かう。

「あーあーったく、依頼はどうしたんだ俺は！」

なんて叫びつつ全力疾走。

…さっきの魔力、尋常では無かった。

とてもでは無いが放つとける物では無さそうだし、フレアスが厳戒態勢なのも恐らくはさっきの魔術の使い手のせいと思われた。

「とりあえず、下からじゃ埒があかない」

叫び声と、もう一度爆音がして煙が出ている方に向かってみたが、やはり土地勘があまり無い為に所々で遠回りせざるをえなかったのだ。

「身体能力制御」

呪文を詠唱、身体能力を強化した足で目の前の二階建て家屋を一気に飛び越えようとして…

「いってえっー！」

「いったあっー！」

何かにぶつかった。

ある魔術師の物語 参話 第二章（後書き）

この物語を楽しんで下さっている方がいるかは分かりませんが、これからも生ぬるい眼で見守ってください。（▽、）

ある魔術師の物語 参話 第三章（前書き）

戦闘描写に不安感がありますが、どうぞ見てやって下さい！

ある魔術師の物語 参話 第三章

ズドガッ！

「ぐえっ！」

カランカラン…

二階建ての建物の屋根あたりの高さから、空中で激突した何かとそのまま落下し、下にあったゴミ箱の上に落ちた。

「身体能力制御ーで身体能力が上がってはいるが、体の硬度はそのままだ。」

その為、ゴミ箱がクッションになったとはいえ、体中が痛い。

「か、っふっ！」

しかも体の上になんか乗ってる。

それが何なのかはうつ伏せの体制の為に見ることが出来ない。

体を起こせずに、しかも落下地点がゴミ箱の上で臭いが酷いため、いい加減体を起こしたかった俺は、

「汝安らかな風の祈りを！」

「風刃っ！」

つい魔術を使ってしまった。

…確かセリアの時にもこの魔術で…

はっとした瞬間に既に作られた風が俺の右手の上に具現、俺の上の物に向かって来て…

「ぎゃあああああああ！」

と、断末魔と共に俺の上の人影らしき物が横に6メートルくらい吹っ飛んだ。

「……」

俺が例え戦闘目的以外で魔術を使ったとしても、必ず人災が起きてしまうのか…？

ていうかあれ死んでないか？

至近距離での直撃で吹っ飛んでったぞ？

俺は立ち上がり、何故か足音を立てないように近づいて行って、なんか痙攣してる、古めかしいローブを着た誰かに声を掛けた

「あのー？もしもーし？生きてますかー？」

「……………おおおおお」

…よし、死んでる。なんか呪いの声みたいの聞こえて必死に立ち上がろうとしてる気がするけど、気のせいさ！

ていうかあの爆発音がした所に早く行かないと！

なんて、背を向けて、逃げようとした瞬間

ガシッ

足を掴まれた！

「うおおおおお！！！」

俺、絶叫。

マジで。

掴んだ直後に下から見上げて来たこの人の恐ろしい眼にやられた！

まるで一昔前に流行った、井戸から這い出てくる幽霊のような眼だ
っ！

「全部俺が悪かった！俺が悪かったあ！」

もう、本気の謝罪。

ここだけの話、幽霊と子供にだけは勝てる気がしない！

「た…」

「た！？」

この下にしがみついて来ている人は、か細い声で呟いた。

「助けて…！」

刹那

ヒュッ

とっさに俺の足を掴んでいる誰かの背中を服越しに掴んで脇に担ぎ、そのまま左に飛んだ。
何故なら、さっきまで俺達が居た場所には、黒いダガーのようなものが飛来したのだから。

トン、トントン

計四発。

なんか、とてもいいリズム感と共に地面へと深く刺さった。

「…ダガーだど？」

こんな状態にも関わらず、頭は冷静だった。

あの飛来したダガーの刺さった位地を見た所、俺を狙った訳ではないようだし、何より

「う…助、けて。助けて…！」

熱に浮かされたように助けてと繰り返す、俺の脇に抱えたこの人の言葉を聞く限り、狙われているのはこの人。

それに加えて爆発音のした方に向かっていた俺と空中で激突したということは、この人は魔術師であり、あの爆発音の方から来たわけ。

「つまりは…っ！」

ビュビュビュビュビュ

第2射は尋常では無い数だった。

視認できる限りでも約三十！

回避はこの人を抱えてたら間に合う訳も無く、今度は俺ごとやる気だっ！

ならば…

ドサッと抱えた人をその場に落とし、右手を前に構える。
正直、魔術は詠唱が間に合わない。

だが、詠唱できなくとも魔術を使えるのが本当の魔術師ってもんでっ！

「ウオオオオオオオオオ！！」

今日何回叫んだかな、なんて考えつつ

叫び、魔力を込める

すると一瞬で右手が光り、腕の血管がブチブチと激痛を伴いつつ嫌な音を立てて断裂し…

大量の血が吹き出した。

あまりの痛みに気を失いそうになるも、たった一言の呪文唱える。

「緋天血界！」

その時、空中の血液が凝縮し…

ガガガガガッ

血桜の盾となって、主の身を守った。

「!？」

盾の向こうで微かに息を呑む気配がしたが、構ってられない。

格好いい物語の主人公ならば、ここで

「何者だ！姿を見せろ！」

とか言って決めるのだろうが、俺はただの魔術師、しかも暗殺者のような陰からの戦い方を得意とする。

戦いの仕掛けや詠唱も出来ない状態で、尚且つ俺の得意体術の間合いでもなく、厄介な荷物を抱えていては戦いようがない。

「…身体能力、制御っ」

呟き、左手で落とした人を担ぎ上げて、残った全力で俺は戦線を離脱した。

ある魔術師の物語 参話 第三章（後書き）

読んで下さってありがとうございました！

出来ればまた次回お会いいたしましょう（＾▽＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1953s/>

ある魔術師の物語 参話

2011年10月8日23時27分発行